

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)
 大学院学生研究
 2024年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 文学 研究科 比較文明学 専攻		
研究代表者 (2025年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年		氏名
	<input checked="" type="checkbox"/> 博士前期課程 2年 <input type="checkbox"/> 博士後期課程 年		米倉伸哉
指導教員	所属部局・職名		氏名
	文学部・教授		林みどり
自然・人文 ・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 名
研究課題	1980年代の在日朝鮮人文学における集合的記憶 ——李良枝作品を中心として		
研究組織 (研究代表者 ・共同研究者) ※2025年3月現 在のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏名
	文学研究科比較文明学専攻 博士課程前期課程2年		米倉 伸哉
研究期間	2024 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 199,240円 / (採択金額) 200,000円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

当該研究の研究目的を含むこと。

本研究は、1980年代の在日朝鮮人文学において、(国家)暴力をめぐる集合的記憶がいかに形象化されてきたのか分析するものである。これまで在日朝鮮人文学の研究・批評は、1960年代を中心として作品における集合的記憶(ここでは特に関東大震災時の朝鮮人虐殺、濟州島4・3事件にまつわるもの)の表象を論じてきた。だがその際に注目されたのは、災禍を実際に体験ないしは親族から見聞きした作家たちの作品であり、80年代以降の作家たちの作品では、こうした記憶の形象が希薄化するとされてきた。

しかし実際には、「第三世代」と呼ばれる80年代以降の作家たちの作品においても、(国家)暴力をめぐる集合的記憶はくりかえし形象化されていた。むしろそれは、60年代の作家たちが有していたような当事者性に起因するものではない。では、いかなる背景が80年代以降の作品における集合的記憶の形象化を可能にし、その形象は前世代の作家たちの作品といかなる差異をはらんでいるのだろうか。本研究は、「第三世代」の筆頭とされる女性作家・李良枝(1955-92)の作品を分析対象に定め、上記の課題を考究するものとなる。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[在日朝鮮人文学] [表象不可能性] [集合的記憶]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

以下の視点を含めて記載のこと。

- ・当該研究は何をどこまで明らかにできたのか(できなかったのか)。
- ・何をもって研究成果(経過)を達成できた(できなかった)と考えられるのか。
自身が設定した研究目的・目標に照らして、その根拠がわかるよう記載のこと。

1. 研究の背景と目的

本研究の目的は、1980年代の在日朝鮮人文学における集合的記憶の表象を分析することで、【1】いかなる言説空間がそれらの表象を可能としたのか、【2】それらの表象が前世代の作家たちの作品といかなる差異をはらんでいるのか、の二点を考究することであった。既存の研究が在日朝鮮人文学の(国家)暴力をめぐる集合的記憶を問題化する際に着目してきたのは、作家本人あるいはその近親者が、想起の対象となる出来事の当事者である場合が大半であった。さらに、出来事の記憶は世代が経るごとに希薄化していくため、80年代以降の作家の作品では「民族」の集合的記憶の表象が後景に退くとみなされてきた。しかし実際には、「第三世代」と呼ばれる80年代以降の作家の作品においても、(国家)暴力をめぐる集合的記憶はくりかえし形象化されていたのである。それらの表象が60年代の作家たちのように当事者性によるものでないことは明らかである以上、「民族性」や「政治性」の希薄化によって有徴化されてきた80年代以降の在日朝鮮人文学は、前世代とは異なる記憶への回路をもちえていたと判断するのが妥当である。

以上のような見立てから研究代表者は、「第三世代」の筆頭とされ、なおかつ80年代を中心に活動した在日朝鮮人の女性作家・李良枝(1955-92)の作品を分析対象に定め、80年代以降の作家たちに集合的記憶の形象化を可能にさせた言説の布置の様相を析出するとともに(上記【1】)、具体的な作品内の表象が前世代の作家たちの作品といかに異なるのか(上記【2】)研究するという着想を得た。

2. 研究内容

研究代表者は前年度まで、上記の観点から李良枝の小説作品を実証的に分析してきた(米倉伸哉「李良枝作品における反転する主題——「除籍謄本」から「かずきめ」へ——」『境界を越えて：比較文明学の現在』24号、2024年、p.159-172)。その際、山梨県立文学館に所蔵される草稿を分析することによって、1982年当時の李良枝にとって関東大震災時の朝鮮人虐殺に対する関心が強くあったことを明らかにした。しかし、ここでは作家個人の動向をとらえるにとどまり、同時代の言説にまで考察の範疇を伸ばすには至らなかった。

こうした反省から本研究では、【1】両国の知識人や文学者を中心に展開された日韓連帯運動、済州島4・3事件をめぐる記憶の政治といった、80年代日韓の現実社会の様相や言説の文脈に作品を位置づける作業を行なった。くわえて、【2】李良枝の小説作品「かずきめ」(『群像』1983年4月)に登場する、関東大震災時の朝鮮人虐殺の記憶や「サイシュウトウ」という語についての考察を施した。社会的文脈を考慮したうえで作品の内在的分析を行うことによって、在日朝鮮人文学における集合的記憶を語る際にしばしば用いられる、狭義の〈当事者〉による記憶の形象化という枠組みに対して、批判的検討をうながすことができると考えた。

研究成果の概要 (つづき)**3. 研究成果と考察**

上記の研究内容を実施した結果、次のような成果を得ることができた。一点目に、【1】1980年代初頭とは、集合的記憶をめぐる忘却の動きに対する対抗的な言説が登場しはじめた時期であり、本研究の対象である李良枝「かずきめ」もまた、同時代の文脈と同期していたことだ。韓国の詩人・金芝河の投獄などの出来事を受けて活発化した日本と韓国の連帯のムーブメントは、植民地過去への反省をその理論的支柱としていたのであり、その際に関東大震災時の朝鮮人虐殺も掘り起こしの対象とされていた。他方の韓国では、民主化まで「済州島4・3事件」をはじめ韓国国家の正当性にかかわる「負の歴史」について、公に議論することが許されなかった。新聞社が真相解明に乗り出す80年代末までのあいだ、出来事を記憶し鎮魂の場を形成してきたのが、金石範などの在日朝鮮人作家であったのだ。既存の批評言説や研究ではその文脈に位置づけられることのなかった「かずきめ」も、(国家)暴力をめぐる集合的記憶を形象化しえていたのである。

しかしそれだけでは、前世代までの作家たちと同様の試みを行なっていたと指摘したに過ぎない。そのため作品を内在的に分析することから、前世代の作家たちとの差異を考察する必要があった。その結果明らかとなったのは、【2】本作において記憶とはその当事者自身や近親者が直接抱いたものではなく、日本が帝国主義体制に突入して以降、被支配者たちの記憶として堆積してきたものであり、作品に登場する朝鮮人女性はその記憶を後天的に身体化していくということである。

上記のふたつの成果によって、民族性／政治性の希薄化として特徴づけられてきた「第三世代」の作品が、実際には同時代の政治的言説と密接にかかわりあいながら、歴史的他者ともいえる植民地期／現代韓国の集合的記憶を形象化していたことが明らかになった。これは狭義の〈当事者〉によるものではない記憶が、いかに形象化されるべきなのか、されうるのかという問いに対する、在日朝鮮人文学研究からのひとつの応答であると言える。

本研究の成果を経てさらなる課題も浮かびあがってきた。李良枝「かずきめ」は複雑な語り(narrative)の構造をもつ作品である。小説は計8つの章で構成され、そのうち半分は在日朝鮮人女性である「彼女」に、残す半分は日本人女性である景子に焦点化される。本研究はこのうち「彼女」の記憶を扱ったわけだが、今後景子の語りを分析することで、高度な歴史性を帯びた他者のトラウマ的記憶を聴きとる／物語る作品の実践にまで分析のスコープを伸ばしていきたい。

また本研究の成果は一般図書として刊行される予定である(次項参照)。これによって、一部の研究者や大学院生に向けた学会発表や学術論文とは異なり、社会にひろく本研究の成果を還元することができた。その一方、本研究での到達をより学術的なフォーマットに則って公表する必要もあるようにも思う。そのため次年度には、上述の課題をふまえたうえで、日本文学分野の学術誌に論文を投稿する予定である。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて研究成果報告書提出フォームより提出してください (紙媒体等、研究成果報告書提出フォームから提出できない場合は、別途リサーチ・イニシアティブセンターへ提出してください)。

①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)

③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)

④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

※修士論文・博士論文は含みません。

① 該当なし

② 図書〔分担執筆〕

米倉伸哉「第2章 (在日)朝鮮人文学を読む——金史良と李良枝から」李里花編『日韓スタディーズ②: 交差する境界と文化』ナカニシヤ出版、2025年7月、55-84頁

③ 該当なし

④ 該当なし